

京都大学映画メディア合同研究室主催第1回シンポジウム 「ポスト・シネマの映像——ゆるる身体とメディアの今——」

発表者4

堀内大暉（京都大学大学院）

タイトル

ホリス・フランプトンの映画における認識論的探求

発表要旨

ホリス・フランプトン（1936-1984）は、アメリカの実験映画を代表する映像作家であると同時に、詩人、写真家、理論家、そしてデジタルアートの先駆者として広く知られている。近年フランプトンの映画は、鑑賞可能な媒体の増加に伴い、国外の映画研究やメディア研究において再び注目を集めつつある。一方国内では、これまでフランプトンの映画が論じられることはほとんどなかった。

1960年代後半から1970年代前半までのフランプトンの映画は、トニー・コンラッドの *The Flicker*（1965）やポール・シャリッツの *N:O:T:H:I:N:G*（1968）などに代表される実験映画の動向の一つであり、批評家であるP・A・シトニーによって定義された「構造映画」の系譜に連なる映画として捉えられてきた。しかしながら、「構造映画」というラベリングに異議を唱え、シトニーとは明確に異なる批評的・理論的な見解に基づいて映画制作を行っていたフランプトンにとって、構造映画の作家がそれ以前の実験映画作家と大きく異なるのは、心理学から認識論への支持の転換にあった。つまりフランプトンは、フェデリコ・ウィンドハウセンが指摘しているように、構造映画の作家の特徴を物質的な「反省」と概念的な「公理」によって、映画そのものを拡張しようと試みていたことに見出したのである。

構造映画の作家の中でもとりわけ認識論的な探求を試みていた当時のフランプトンの映画は、従来の受動的な鑑賞から能動的な鑑賞へと、観客に新たな身体性を提供している。そしてとりわけ「公理」という概念は、数学の集合論を援用や言語や音を特徴的に使用によって、システムティックに構成された当時のフランプトンの映画を理解する上で、極めて有用である。

以上を踏まえ、本発表では当時のフランプトンの論考や先行研究を基に、当時のフランプトンの映画である *Surface Tension*（1968）や *Zorns Lemma*（1970）を、数学や言語などの観点から多角的に分析し、フランプトンが映画に対しどのように思考していたのか、その一端を明らかにすることを試みる。